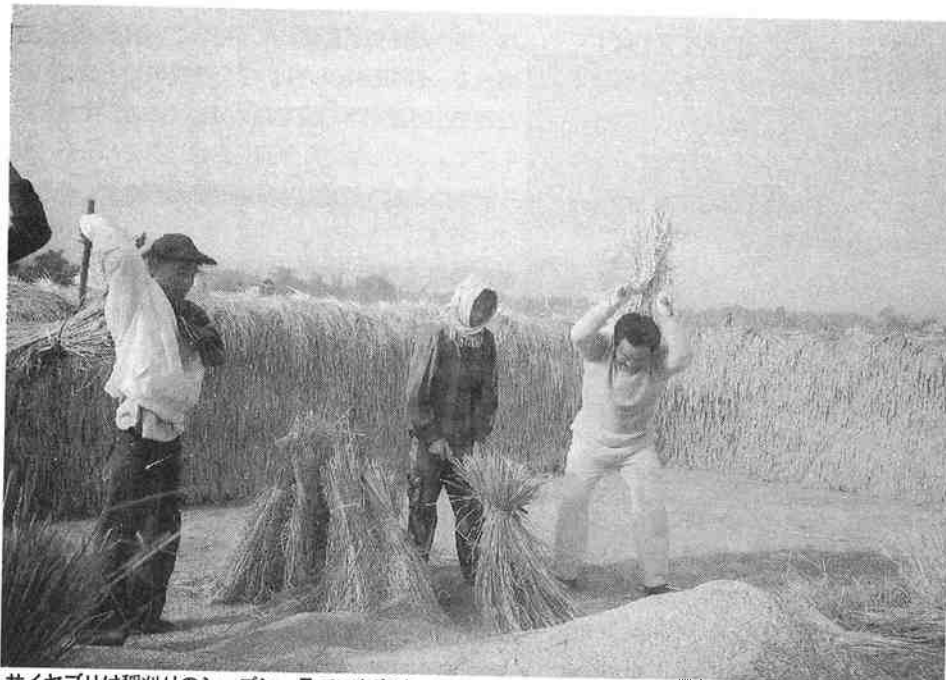


ラオスの子ども通信 19号

(2000年12月発行)



サイヤプリは稲刈りのシーズン。見ていた森は、お前もやってみるかといわれて。

図書箱・袋の利用状況調査報告 2000年11月20日(月)～26日(日)

森 透

11月末のサイヤプリは、ススキの穂がたなびき、刈り取った稲が積み上げられ、それは晩秋の日本の風景のようでした。今回の出張は、これまでに小学校に届けた移動図書箱・図書袋の利用状況の調査が目的でした。過去10年間、「全国の小学校に図書箱を」として、ラオス政府主導によって行われてきた読書推進運動の総括会議を、ドナーであるSVA、UNESCOとともに12月15～18日にヴィエンチャンで開催する予定で、それに向けた調査で、ASPBによる配付先だけでなく、SVAが手がけた学校も訪問しました。

■最近の取り組み、サイヤプリの特徴

調査メンバーは、サイヤプリ県の読書推進運動の責任者であるプアチャンさん、教育省と国立図書館の職員、ASPBからはソペットと森です。

今回、サイヤプリ県の中心都市サイヤプリと、そこから100キロほど北上したホンサー郡を訪れました。サイヤプリ県では授業時間に図書の時間を設けて

おり、これは他県にはない先進的な取り組みです。また最近の動きで、UNICEF主導といわれる全国的な取り組みとしてクラスター制度が進められています。まだ、すべてに普及しているわけではありませんが、一定の地域内に一校マスター校を設け、そこには図書室が設けられ(他の学校は職員室などに箱を設置)、専任の図書担当教員がいます。

■利用状況・管理状況

よく読まれている本、あるいはほとんどページを開いた形跡がない本など、利用状況は本を見ればすぐにわかります。図書室がなかったり、あっても暗くて狭く、また蔵書も少ないのに、本当に丁寧に読んでいる学校もあれば、広くて明るい部屋なのに掃除が行き届かず、本もページがばらばらになったままにしている学校もあります。

ある学校で、ページがばらばらになってしまったのを糸でかがって直してある本を見つけました。その学校は図書専任の教員がいるにも関わらず、他の本は補修が不十分だったので、専任に「あなたが直したの」と聞くと、「生徒が借りた本を直して返してきた」との話でした。そういう生徒をこそ図書係りにしたいところです。行き届いた学校では、生徒の図書係り、図書室清掃係りがいます。

サイヤブリでは「読書の時間」が設けられ、曜日ごとに学年別で、「月曜の午後は3年生」というように決められています。ただし学校によって、利用時間が30分の場合もあれば、午前中としているところもあり、図書室で読んだり、教室や校庭に運び出して読んだり、それぞれです。

程度の差はあるが、紛失もあります。しかし、その原因は利用の活性化に伴う場合と、管理が悪い場合の2通りが考えられます。ASPBのヴィエンチャン・スタッフのソンペットは、「本は大事に。でも、なくなるのを恐れなくて」と先生に伝えていました。図書の利用や管理のよい学校、不十分な学校。その違いは先生の意識の差なのでしょう。

■マスター校の独自の工夫と新たな問題点

マスター校の図書専任教員は教材づくりも担当するようで、SVAのトーシャバンを使って文集を作っていました。図書室は、自分たちで図書袋をつくって書架として利用したり、担当を2人設けたり、利用記録を壁一面に張り出していたり、それぞれに工夫がされていました。

一方で気になったのは、専任が設けられたことで他の先生は「自分の仕事ではない」と受け止めるようになっていたといったことでした。

今回の調査では、スーパーバイザーと呼ばれる役職

の人が同行しました。郡の教育省の学校図書担当です。マスター校制度を導入したことで、スーパーバイザーの役割が重要になってきています。各校を回って、それぞれのノウハウを各校に知らせていくことで、図書利用の質を高めていくことができるからです。しかしながら今回見かけたスーパーバイザーが単なる案内役になっていたのは残念でした。

■読書推進運動の3つのドナー

今回、他団体の活動現場の調査という経験を初めてしました。

すでにマスター校になっている学校に、UNICEFから新たに図書箱が届けられていました。ブアチャンさんは、「ここは図書室があるのだから、箱は他校に回してください」と、そこの先生に言いました。別の学校ではUNICEFは図書室を設置したが、本は供給していないそうで、そうすると本を供給するのはASPBの仕事かと考えました。

図書箱を新規に学校に設置する際、教員にトレーニングが行われます。SVAは4日間、ASPBは予算の関係で2日間。「その差が本の管理に現れている」と、ソンペットは指摘します。すなわち、時間に余裕があれば口頭での説明ですませるのでなく、実習を通して先生に覚えてもらえるということです。

またSVAはトーシャバンを学校に設置し、教材開発を推進しています。生徒の生活日記、教員による昔話などを冊子にしていました。例えば、トーシャバンを利用して生活日記をつくったら、子どもの親に見せるなどして、読書推進への理解を得て、本の補修・補充の寄付を仰ぐことはできないだろうかと思いました。人々が本のコスト負担をする中で、「図書室は自分たちのものである」という意識も大きくなり、利用も促進されるのではないのでしょうか。このように各ドナーの活動を見つめつつ、読書推進運動の全体をコントロールする役割が求められていると感じました。サイヤブリ県ならブアチャンさんが目を配っています。他県では、なかなかそんな人物が現れていないように思います。

■図書の補充と補修、先生のトレーニング

さて、新規の本が補充されなければ、活性化せよと

言われても限界があるのは当然の話です。例えば、児童数235人のバンポーン小学校と児童数404人のバンターナー小学校。いずれも94年に箱に入った約140冊の本が届き、次に本が追加されたのは98年です。

補充あってこそその活性化です。今回、訪問したいいくつかの学校から、「本が届いた当時は子どもも村の人も興味を持って読んだ」との声が出ました。とはいえ、補充にも限界があります。予算もですが、本の作り手も足りないからです。

そうすると、やる気のある学校に対して優先的に補充をしていきたいところです。そうでなければ無駄になるからです。そこで、補修が不十分な学校に対しては、まずスーパーバイザーなどが補修の指導をした上で、それを実施している学校に対して補充すべきだと思いました。

今回の訪問は稲刈りシーズンでした。そのため、休校の学校もありました。先生は農家のお父さん、お母さんでもあります。学校に全力投球することはなかなか難しいのが現実です。また、図書担当も、2年で異動という例も少なくありません。そこで、ASPBが今、考えているのは、教員養成の段階で図書利用の訓練をしっかりとすることだということです。

■地域で支える

学校の図書は地域で支える。こうなることがめざす方向だと思います。実際、学校によっては、地域の住民の理解を得て、補充用のテープなどを寄付してもらって例もありました。また、ブアチャンさんは、村の祭りなど、人が集まる時に図書箱を持って行ってアピールするようにアドバイスしていました。

「人々は本にお金は出さないんですか」

森は、調査メンバーに聞きました。

「本は高いから、人々は買えない」

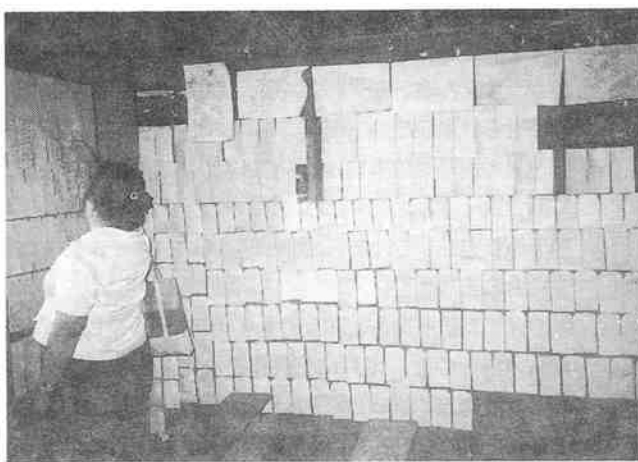
という返事でした。

「でも、ビール1本と同じでしょう」

すると、それまで黙っていた運転手氏が

「あれは金持ちの飲み物だよ」

サイヤブリの町には、中国映画のビデオやCD-



ROMのレンタル屋もあり、夜は学習塾も見かけました。バイクに乗って通学する高校生もいます。しかし本屋はない。本の地位は低いのでしょうか。どうも、その辺りのことがよくわかっていないのがわれわれです。

■調査の限界

今回の調査は、従来のフォローアップでの調査以上のことはできませんでした。すなわち、学校に訪問し、校長と図書担当教員のみを取材するというにとどまりました。本来であれば、図書担当以外の教員、子ども、村の住民から聞き取り、さらに図書箱を設置していない学校との比較を行うべきだったと思います。

先生からの聞き取りだけでは状況の把握をするのに十分とはいえません。例えば、ある学校で、担当の先生は「読み聞かせをしています」と言うので、実際に子どもたちに読み聞かせをしてもらいました。すると、子どもたちは集中せず、そわそわとして、あまり話を聞いていませんでした。その先生はまだ担当になって日が浅く慣れていなかったようです。そこで、読み聞かせの仕方をアドバイスしました。他のどこの学校も読み聞かせをすると語っていたが、実際、子どもたちを話にどれくらい引き込むことができるのか、今回の調査からはわかりませんでした。

「2000年ASPB民話絵本コンクール」の 受賞作品が決定しました。

2000年3月、ヴィエンチャンで「民話絵本づくりセミナー」を行い、その後、コンクールへの応募作品がラオス各地からヴィエンチャン事務所に28作品が寄せられました。

「村の民話を絵本にしよう」という主旨で、語りを聞き取ってお話をまとめ、絵本に仕上げているという作り方をしています。前号ではその中の一作品を紹介しました。

ヴィエンチャンと東京とでキャッチボールをしながらの審査の上、12月に受賞作を決定。当初、設定した優秀賞（副賞200ドル）と奨励賞（副賞100ドル）を設けましたが、優秀賞は、残念ながら該当作品なし。奨励賞には、サイヤブリ県のウタイさん（お話）とヴェットさん（絵）という2人の女性による「働きのトゥーノイヤー」が決まり、出版することになりました（お話の内容はp6をご覧ください）。

そしてさらに準奨励賞（副賞50ドル）を設け、ヴィエンチャン市のテプヌハックさん（お話）とカンバンさん（絵）というやはり2人の女性による「孤児と魔法の銅鑼」を決定。これは、ヴィエンチャンの町がどうやって生まれたのかというお話で、2番目に出版することになりました。

審査は、ヴィエンチャンでは、ASPBの協力者である作家のドゥアンドゥアンさんと編集者のオートンさん、そしてASPBのスタッフによって行われました。絵よりもお話重視で、応募作品が口承による昔話であるか、内容的によい教訓があるか、といった面で絞り込まれました。

一方、東京では、絵本・紙芝居作家のわかやまけんさん、やべみつのりさん、長野ヒデ子さんと編集者の井上博子さん、そしてASPBスタッフによって行われ、お話と絵の面白さ、オリジナリティ、子どもに読んでもらいたいお話か、といった点から選び出しました。それぞれに、評価の観点も異なりましたが、上記作品に決定しました。

全般的に面白いおはなしが多かったのですが、絵本作品としての仕上がりという点で観ると、文章、

絵ともにこれからという印象でした。そこで、面白いおはなしに対して「おはなし賞」（副賞：10万キップ）を10作品に、絵には「絵画賞」（副賞：20万キップと絵の具）を5作品に、準絵画賞（副賞：10万キップ）を2作品に贈りました。

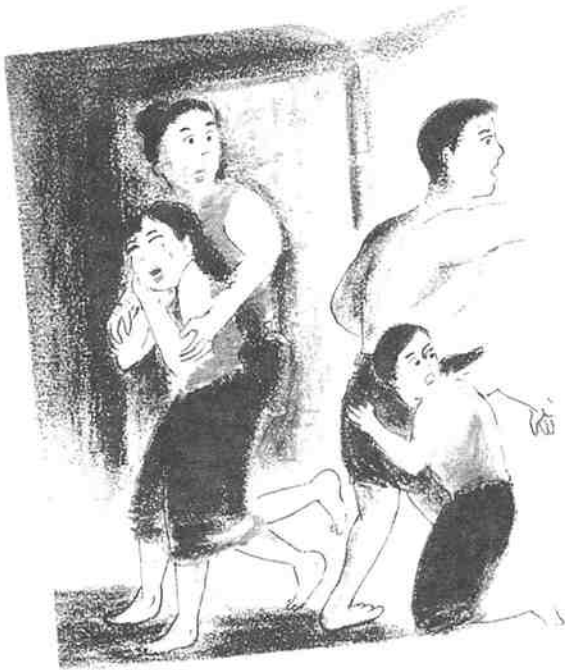
なお、出版にあたっては、ページの構成や、絵を描き加えたほうがもっと面白くなるという場面などについて作家に助言していきます。

また、絵画の優れた作品について、ヴィエンチャンのASPBで原画展を開催します。

さて、東京で審査を行うにあたって、ラオス語で書かれた28作品のお話を日本語にしなければなりません。そこで、ラオスからの留学生のヴィエンシーさんが口頭で翻訳し、それをスタッフが書き取っていくという方法をとりました。その作業は、なかなかたいへんであり、楽しくもありました。例えば、「うーん、これは何と訳したらいいかなあ」とヴィエンシーさんが言うと、スタッフが「こんなとき、日本では、壁に耳あり障子に目あり、って言うよ」というと、「あっ、それぞれ、同じことが書いてある」という具合に。手探りをしながら、ラオスの昔話の金鉱を掘り当てているような気分でした。

今回のコンクールに、応募作が、ヴィエンチャンだけでなく、サイヤブリやサワンナケートなど、全国規模で寄せられたことは、私たちが勇気づけました。作風も、いままでのラオスの絵本で見られなかった絵が寄せられ、今後の出版物に起用していきたいと考えています。

一方、今回の審査を経て、絵本作品という形式での募集の困難さを感じた面もありました。3月に募集を開始し、7月いっぱい応募締め切りと、非常に短期間であったことは反省すべき点ですが、募集する形態が絵本であるのがよいのかは、今後に残された検討課題であるといえます。本の少ないラオスで出版の担い手を増やしたいというのがコンクールの主旨であり、今後、よりよい形態を探っていきたいと考えています。



猫が顔を洗うわけは。 — ラオスの昔話を翻訳して

ヴィエンシー（東海大学留学生）

コンクール作品の審査のために翻訳を手伝ってくれたヴィエンシーさんに、感想を寄せてもらいました。

私は今までいくつかの翻訳をしたことがありますが、その内容は私にとって決して簡単なものではありませんでした。そして、今回初めてラオスの昔話の翻訳をしました。経験不足、知識不足ということもありますが、それに加えて、昔話ということで、ラオス語から日本語に訳するのにいろいろな問題がありました。特に単語は今の日常会話で使っている言葉ではなく大昔の言葉なので、日本語に直すとき、自分の文法や単語の知識不足から適当な言葉が思い浮かばないことも幾度もありました。

今回翻訳した昔話で、私の一番面白いと思ったストーリーは『猫と鳥』というものでした。なぜかという、ストーリーの中で、猫が鳥を捕まえて食べ

ようとしたとき、猫が鳥に「私を食べたければ、顔を洗って、歯を磨いてからにしたらどうですか」と言われ、猫が鳥に言われた通りにして帰ってきたら、鳥がいなくなっていました。それで猫が「これからはえさを食べてから顔を洗おう」と決心をしました。それで猫は今でもえさを食べた後に顔を洗うのです。私はこの話を読むまで、猫が顔を洗うのを不思議に思ってもいませんでした。でも、ここで私が興味を持ったのは、鳥が生き残るための知恵を持っているということです。

今回の翻訳のお陰で自分の知識、単語力を増やすことができ、貴重な勉強になりました。

民話絵本コンクール受賞作品紹介

働き者のトゥーノイヤー (モン族のおはなし)

昔、ある夫婦に1人息子がいました。息子の名前はトゥーノイヤー。モン族の言葉で、トゥーは最愛の息子、ノイは偉い、ヤーはお金の意味ですが、一家は貧しく、とても小さな家に住んでいました。

ある日、貧しさのあまり、父が亡くなりました。父の最後の言葉は「骨はベッドの2本の足の所に埋めて欲しい」でした。あとを追うように母も死にました。最後の言葉は父と同じで「骨はベッドの2本の足の所に埋めて欲しい」でした。

「本当に困った時、骨の壺を取り出しなさい。そうすれば望みがかなうから。望みがかなったら、自分だけでなく村のことも大切にいなさい」と付け加えました。

トゥーノイヤーは1人ぼっちになると、生活はもっと苦しくなり、脱穀の手伝いをしました。なかにはたくさんお金をくれる人もいたけれど、少ししかくれなかったり、殴られたうえ、お金をもらえないこともありました。

ある日のこと、王様が年をとった自分の代わりとなる者を探していることを人々に告げ、後継者選びのための4つの試験を行うことにしました。絵を描くのが上手く、ケーンを見事に奏で、弓に秀で、馬術の名手であること。試験は正月に行われることになりました。

正月になり、人々は町に集まってきました。しかしトゥーノイヤーだけは、金持ちの家の木の下で、モミの中からネズミの糞をとる仕事をしていました。かわいそうに思った人が、「ノイヤーちゃん、お祭りのことを知らないの？」と声をかけると、「ぼくは貧しくて入れてもらえない」と言いながら、もし父さん母さんが生きていたら行けたのにと思いました。

次に鳥が飛んできて米を食べました。トゥーノイヤーが「そんなことをして、ぼくをかわいそうだと思わないの。米が足りないで殴られてしまうのだよ」と言うと、鳥は「私が手伝いましょう。水浴びに行きなさい。親の遺言を覚えていないの？」
「そうだ」。トゥーノイヤーは思い出しました。鳥が手伝ったので仕事は早く終わり、骨の壺を掘りました。ベッドの脚の下を掘ると馬が出てきました。

もう一つの脚の下を掘ると今度はケーン。次は靴。最後は金と銀でできた服が出てきました。トゥーノイヤーは急いで服を着ると、馬に乗り、王様のところに行きました。

だれもがトゥーノイヤーに注目しました。最初の試験は絵を描くこと。少し描くと、不思議なことに、たちまち絵になって、一等賞をもらいました。

ケーンの試験はトゥーノイヤーが最後で、や木の葉と一緒に演奏しているようでした。次は弓。トゥーノイヤーの弓はとても小さかったので、ほかの男が「今度こそは俺たちの番だ」と言いました。ところが、だれも的に当たりません。

王様は「残っているのはお前だけだ」と言い、トゥーノイヤーが弓を射ると、1回、2回、3回と真ん中に当たりました。

みんな口惜しがりながらも、この子はどこから来た子だろうと思っていました。誰もまさか、あのトゥーノイヤーだとは思いませんでした。

最後は馬の試合です。ところが馬はあまり走りません。人々の声援が聞こえます。今度はだめだ、とトゥーノイヤーは思いました。ところが、そのとき、馬が一気に飛び出してゴールに入りました。

こうして、王様は「次の王様はお前にする」と、トゥーノイヤーに言いました。そして、トゥーノイヤーは幸せに暮らしました。

(モン族はラオスの少数民族。ケーンは竹で作った楽器)



支援がラオスの子どもたちに届きました。

企業によるプロジェクト支援-----「学校図書室」視察報告

キャノン株式会社 社会・文化支援室 宮崎康子さん

社員のみなさんのチャリティ収益をもとに開設した学校図書室を視察し、支援の成果を確認するため、キャノン株式会社の宮崎康子さんがヴィエンチャンとルアンパバンを訪問されました。

キャノン 社会・文化支援室では1997年から毎年、全国の社員から読み終えた本や聴かなくなったCDを集め、社内で「チャリティ・ブック・フェア(バザー)」を開催し、その収益金をもとに微力ながらラオスの子どもたちの教育の向上を支援しています。これまで、ASPBを通してラオス語の絵本4種類(タオカムとつばめ、トーホア、カンバーピーノイ、文字絵本3)をラオス現地で作成・印刷し、配布してきました。また学校図書室4室(ヴィエンチャン特別市およびルアンパバン県にて)の設置も行いました。この度「これまでの支援が子どもたちに役立っているのか、そして今後の支援はどうあるべきか」を模索するため、現地ラオスを訪問しました。

ラオスでは学校図書室4校(ルアンパバン県はサントパーブ中等学校、サティット小学校、ヴィエンチャン特別市はポーオー高等学校、トンボン高等学校)を訪問し、先生方から教育環境や学校図書室の利用状況について、また教育局ではラオスの教育問題や図書的重要性など、貴重なお話を聞くことができました。子ども文化センターやASPBヴィエンチャン事務所では、子どもたちが歌を歌ったり、楽器を弾いたりして遊ぶ様子を見学することができました。

実際に学校図書室を利用している生徒ともふれ合うことができ、簡単な英語でお話をすることができました。ラオスの子供たちは、あまり海外の人と接することがないせいか、とても恥ずかしがり屋でした。しかし、図書室で本を読んでいる生徒に「図書室はよく利用するの?どんな本が好き?」とたずねると、はにかみながら「毎日来ています。英語の本が好きで

す。」と目を輝かせて答えてくれました。小学校では休み時間に図書室にたくさんの生徒が集まり、座ったり寝ころんだりしながら楽しそうに絵本を読んでいた。

特に人気のある本は、小学生では絵本や民話など、高校生になると、英語や科学の本、女生徒には料理、花、裁縫などいろいろな分野の本に興味があるようでした。しかし図書室には本が少なく、何度も読まれているためボロボロのものもかなりありました。また椅子や机などの備品も少なく、今後は図書の量や質、管理などを含めて、図書室の維持をどうしていくかが、重要な課題だと感じました。

日本では当たり前のように接している本が、ラオスではたいへん貴重に扱われており、本を通して文字を覚えること、情報を得ることは教育の原点であることを改めて認識しました。きびしい教育環境の中、21世紀の国の発展を担う子どもたちに、本を読むことの楽しさや情報を得ることの感動を少しでも持ってもらえたらと思います。



トンボン高等学校の先生と生徒のみなさん

チャンタソンさんにしつもん! 「ラオスの子どもたちは何してあそんでるの?」

ASPB代表のチャンタソンが、事務所のすぐ近くの梅田小学校の5年生にラオスのくらしや子どもたちについてお話をしました。梅田小の子どもたちから寄せられた質問に、誌上でお答えします。(誌面の都合で全部は載せられませんでした。ごめんなさい)

●ラオスでは、みんなどんなことをして遊んでいるの?

まちの子どもは、サッカー、テレビゲームなんかをして遊びます。いなかの子どもは、籐でできたボールをけるセパタクローをしたり、木の実のたねでおはじき遊びなどを楽しんでいます。

●どんな本が好きなのかな?

民話の本やなぞなぞの本、ことば遊びの本は人気があります。みなさんはどんな本が好きですか?ひよっとしてマンガ本?

●ラオスのゲームカセットは何がありますか?

日本のと同じようなものがあります。でも、タイを通してラオスに入ってくるので、少し遅いようです。本はほとんどないのにゲームは日本と同じようなものがあるなんて、不思議ですよ。

●ラオスの子は、日本に来てみたいと思っているのかな?

みんな日本にはすごく興味を持っています。日本の本に出てくるお話を劇にしたこともあるんですよ。たとえば「ももたろう」とか。

●生活などでいちばん苦労することは何ですか?

まちの子どもは毎日塾があるので、思い切り遊べないのが苦労かもしれません。日本と同じですね。いなかの子は、遠くにある井戸から水をくんでくことや、ごはんを炊くためのまきを拾ってくることなど、苦労があるようです。

●生活する中で、何がものたりないですか?

日本みたいな娯楽はあまりありませんが、子どもたちは家事の手伝いをちゃんとしたあとで、いろいろと考えて工夫して、いっしょうけんめい遊んでいます。だからものたりないってことはあまり感じないんじゃないかしら。

●いちばんおもしろいことは何ですか?

川で魚つりをしたり、野生のくだものをとったり、鳥をとったり、遊びでいろんな「えもの」がとれるのはとっても面白いと思います。あとで家族みんなで食べられますからね。

●みんながいちばんしてみたいことは何ですか?

たぶん旅行だろうと思います。ふつうは、自分の村から出ることはないのですが、このごろでは道路もよくなり、バスが通るようになりました。村人があちこちへ行けるようになって、子どもたちも、ほかのまちのことや、いろいろなことを耳にしたり、知ることがで

きるようになりました。

●ラオスにはどんなたべものがありますか?

代表的な料理は、牛、ブタ、とり、水牛の肉を使って、いろいろなスパイスを入れる「たたき」のような料理で、ラープというのがあります。ラープはラオス人にとってはごちそうで、お祝いのときには必ず食べます。そのほかに、ふだんよく食べるのは、川でとれた魚のスープや、野菜を蒸したり焼いたりしたもの。特に野菜はたっぷり食べています。

●ラオスは環境のいい国ですか?

ラオスでは、まだ村のまわりに自然が残っているので、森の中にある山菜やきのこ、木の実をとって食べることができます。だから飢えということはありません。そして、工業がほとんどないため、川の水もきれいです。でも、最近では、外国に売るために山の木を切りすぎたり、ダムをたくさんつくったりして、自然環境は変わってきています。まちでは、ビニールやプラスチックのゴミが散らかっていて、問題になっています。いままでたべものを包むのはバナナの葉でしたから捨てても腐って土になるのでよかったです。ところが、ビニールは腐らないのに、バナナの葉と同じように捨ててしまうのです。私たちは、ゴミがふえるとうどうなるか、といった身の回りの環境を考えるような絵本をつくらうと準備しているところなんです。

●いつから絵本を書き始めたの?

ラオスで本を作りはじめたのは、今から10年前です。わたし自身は絵本を書いていませんが、ラオス人の作家・画家が絵本をつくる手伝いをしています。ラオスで本を出版するために、日本で募金を集めたり、もっといい絵本ができるように日本の絵本作家の人に相談したりするのが、わたしたちの仕事です。

●目はどのくらい良いのですか?

わたしの以前の視力は両目とも1.2以上でした。今は老眼になって、めがねをかけないと文字が読めません。でも、ふつうはラオスの人はいくらもめがねをかけていません。

●ラオスの家は何でできているの?

まちの家はレンガでできていて、いなかの家は木や竹でできています。いなかの家は風通しがよく、夏はとても快適です。

●ラオスの首都はどこですか?

ヴィエンチャンです。東京と違って背の高いビルがなく、緑の木がたくさんあります。お寺もたくさんあり

ます。まちの南側をメコン川が流れていて、川沿いは散歩したり屋台でごはんを食べたり、気持ちのいい場所です。最近では車やバイクが増え、渋滞や交通事故が増えてきています。

●ラオスで、みんなでがんばってほしいことは何ですか？

学校に行ってほしいと思います。特に小学生に。少なくとも小学5年生まで行って卒業してほしい。ラオスでは小学校に入っても、いろいろな理由で卒業しない人も多いのです。

●ラオスでは100円でどれくらいのものが買えますか？

ラーメン1杯またはジュース1本。
ノートなら4冊、ボールペンなら6本。
砂糖2キロ、またはたまご16個。コーヒーなら4～5杯。

●わたしもラオスの子どもたちに絵本を作ってあげたいのですが、

ぜひとも作ってください。絵だけの絵本でもいいし、少し文章をつけてもいいですね。実は、最近ラオスで

出会った女の子（みなさんより少しお姉さんです）に将来の夢を聞いたところ、「作家になりたい」と言ったのです。それを聞いてわたしはとてうれしくなりました。なぜなら、ラオスにはいままで本も少なく作家という仕事はほとんどなかったのです。この女の子はわたしたちが届けた絵本をよく読んでいました。自分も作家になりたいなんて、よっぽど本が好きなんでしょう。将来あなたがつくった絵本をラオスの子どもたちが楽しみ、ラオスの絵本を日本の子どもたちが楽しめるようになったらすてきだと思いますか。

●チャンタソンさんは、ラオスの暮らしの中でどんなことが楽しかったですか？

毎日朝・昼・晩3食とも、家族全員でお話ししながら食事ができたことです。

●ラオスの国で流行った病気は何ですか？

ラオスは寒くはありませんが（寒くても14～15℃くらい）、12月から2月の間はカゼが流行ることがよくあります。1年中流行る病気は、下痢が多いですね。

東京事務所の動き

2000年9月

10日 運営会議

15日 「日帰り合宿」

29日 通信18号発送作業

2000年10月

1日 運営会議

4日 「南」の子ども支援NGOネットワーク学習会（JANIC）に参加

4～8日 ワンワールドフェスタ北多摩（東村山会場）

- ・「ラオスの子どもたちと紙芝居」展
紙芝居セミナーの作品や、ポリカムサイ子ども文化センターの子どもたちの共同制作によるピー（精霊）の絵を展示しました。

- ・おはなしとラオスの紙芝居実演
（やべみつのりさん、蛤谷一通さん、蛤谷糸美さん）

5日 大田区立池雪小学校ユニセフボランティア赤井の活動報告のあと、みんなで絵本にラオス語の翻訳を貼る作業をしました。

7～8日 国際協力フェスティバル

14日 民話絵本コンクール審査会（事務所にて）

21～22日 O T Aふれあいフェスタ

25日 山形県新庄市立日新中学校修学旅行受け入れ

27日 「南」の子ども支援NGOネットワーク学習会（JANIC）に参加

31日 大田区国際ボランティア貯金推進協力会総会・赤井と小川が活動報告を行いました。

2000年11月

12日 運営会議

14日 「南」の子ども支援NGOネットワーク学習会（JANIC）に参加

15日 外務省「NGO活動環境整備支援事業」NGO研究会

18日 大田区立梅田小学校
開校記念日に、6年生を中心とした有志18人とお母さんたちが、絵本にラオス語翻訳を貼るボランティアをしてくださいました。

20日 大田区 国際交流の会ボランティア講座
チャンタソンがラオスの生活・文化・教育についてスライドを使ってお話したあと、絵本に翻訳を貼る作業を楽しみました。

28日 ラオスフェア2000（新宿 常圓寺）
タートルアン祭にちなんで、日蓮宗主催のイベント。留学生が料理を作ったり伝統舞踊を披露したり、多彩なラオスが紹介されました。ASPは協賛団体としてブース出展しました。

チャンタソン アジア女性・人権特別賞を受賞

「子どもの本が無いなんて困ったものだ」と出発した私たちの活動も、18年。

知識を持ってないために自分の道を選択できないなんて、これは人権に係わることだ、と考え方が変化してきています。

この会の活動をリードし、さらに女性のための職業訓練所をヴィエンチャンで運営している団体の代表でもあるチャンタソンに対し、アジア人権基金から第5回アジア女性人権特別賞が与えられました。

会ならびにチャンタソンの、ラオスの子ども及び女性たちの人権改善への継続的な取り組みが評価されたということです。12月3日（日）飯田橋で行われた授賞式には、会の関係者の方々も多数ご参加くださり、受賞をともに祝いました。

同時に行われた「ラオスの子どもと女性の未来に思いを寄せて」と題する記念講演で、チャンタソンは、これらの活動が一個人のものでなく、多くの方々のご支援によるものであること、さらなる活動の展開として、「ラオス・アジア」とい

う大きな枠組みを考えられる人材を輩出するために、彼女がヴィエンチャンに「大学」を設置する活動を始めていることが話されました。会としても、多くの方々のご支援の力により、私たちの活動が継続でき、評価をいただき、少しずつながらも成果が見えだしたことに、感謝をいたします。

受賞に関する記事はアジア人権基金ホームページ <http://www.jca.apc.org/fhra/> をご参照ください。



シニアワーク東京で開かれた授賞式。アジア人権基金の土井たか子さんと。

東京事務所から

●国立国際子ども図書館に絵本を寄贈

ASPBがラオスで出版した絵本・児童書は、1990年からこれまでに67種類（再版含む）、約30万冊に上ります。中には全部配付し終えて在庫のないものもありますが、東京事務所保管していた34種類、58冊を、このほど国立国際子ども図書館（東京・上野に5月オープン）に寄贈しました。去る6月に見学した時には、資料室にラオスの絵本はたった1冊しかありませんでしたが、2001年の完全オープン時には、これらASPBの絵本が書架に並ぶことでしょう。今後出版する絵本も、引き続き寄贈していきます。絵本を通して多くの方にラオスとラオスの出版や教育事情を知っていただくとともに、研究などにも貢献できればと思います。

●ラオス人留学生との交流会「ラオスを語ろう」

これまでイベントなどにご協力いただいているラオスからの留学生のみなさんと、日本のボランティアやメンバーとの交流を深め、もっとラオスを知りASPBの活動に親しもうという集いです。活動に関心のある方ならどな

たでもご参加いただけます。必ず事前にお申し込みください。

日時：12月29日（金）15:00～（予定）

会場：駒場留学生会館

スタディーホール1階 多目的室

（京王井の頭線「駒場東大前駅」下車徒歩2分）

内容：作家ドゥアンドゥアンさんとASPBラオススタッフも参加し、ともにラオスの教育の現状などについて語り合います。

ASPB活動紹介（ラオスからスタッフも参加）、留学生との意見交換などを企画中です。

ラオス料理と軽食つき。

会費：1,000円

お申し込み・お問い合わせ：

ラオスの子どもに絵本を送る会

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail

FAXと電子メールには必ず〒住所と電話番号を明記してください。

●ラオスからスタッフが来日

12月28日～2001年1月5日、ラオス事務所のソンベトさんと出版コーディネーターのドゥアン・ドゥアンさんが来日します。1月2日と3日の会議に出席するためです。12月29日の交流会・忘年会にも参加します。

●スタディツアーに参加しませんか？

アサヒビール株式会社の社会貢献部門との共同企画で、同社員のスタディツアーを実施することになりました。(アサヒビールからは5名が参加予定) ヴィエンチャン市で学校図書室「Hak Arn」開設の活動に参加し、先生や子どもたちと交流するという内容です。日ごろASPBの活動にご支援、ご協力いただいているみなさん、この機会に現地活動に触れてみませんか。

以下のように参加者を募集します。興味のある方は詳しい資料をご請求ください。(一般公募はしません)

日程：2001年2月11日～2月17日(6泊7日)

参加費：お一人18万5千円(予定)

募集人員：5名程度

●NGO屋台村(札幌市)

国際協力・NGO活動を紹介し、札幌市のみなさんやNGO同士が交流をはかるイベントです。ASPBは2000年に続いて、2001年も参加する予定です。お近くにお住まいの方はぜひ会場においでください。また、当日のボランティアも募集しますので、ASPB事務局までお問い合わせください。

日時：2001年1月20日(土)～21日(日)

会場：札幌市生涯学習総合センター「ちえりあ」

●TOKYO地球市民フェスタ2001(東京)

「世界とつながる・街がかわる・新しいであい」を合い言葉に、国際協力・交流・外国人支援の市民団体の活動と東京都の取り組みを紹介。一人ひとりが地球市民として世界の現状を考え、行動を起こすきっかけづくりのイベントです。ASPBは「NGO広場」(フリーマーケット形式の活動紹介とグッズ販売)に参加します。

日時：2001年2月3日(土)～4日(日)

場所：東京国際フォーラム

●新刊紹介

「ソムポーンのやさしさ」(改訂再版)

ウティン・ブンヤヴォン作

シートーン・チャンター・スック絵

5000部印刷



キッコマン株式会社の2000年バレンタインチャリティ募金とマッチングギフトによるご支援をいただきました。

「ふしぎな4人の兄弟」(新刊)

コンドゥアン・ネッタヴォン作

ヌアンニパー・ノークム絵

5000部印刷



●ラオスのあったか〜いデザート●

「かぼちゃのおしるこ」

国際協力フェスティバルなど、イベントでおなじみのラオスのデザートを、ご家庭でつくってみませんか？ 材料はかぼちゃのほか、さつまいもや里芋、バナナなどでもおいしくできます。ミックスマもOK。コーンを加えると食感も楽しめます。

材料(4人分)

- ・かぼちゃ 1/2個
- ・ココナツミルク 1缶(400ml)
- ・砂糖 1/2カップ
- ・塩 少々

作り方

- 1、かぼちゃを1～1.5cmくらいのさいの目に切る。(皮は好みで取り除いても残してもいい)
- 2、かぼちゃを、かぶるくらいの水で煮る。
- 3、かぼちゃがやわらかくなったら、ココナツミルクと砂糖を加える。(ココナツミルクの濃さと砂糖の量は好みで調節)
- 4、甘みを引き立てるため、仕上げに塩をひとつまみ加え、味をみてできあがり。